

「気持ちを伝える」英語コミュニケーション力 — 会話分析からの一考察 —

早野 薫

お茶の水女子大学外国語教育センター 〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1

E-mail: hayano.kaoru@ocha.ac.jp

概要 日本人英語学習者の多くにとって、英語での会話の中で自分の気持ちを自然に相手に伝え、円滑にコミュニケーションするという事は、非常に難しいことである。しかし、相互理解を積み重ね、相手との関係構築につながるコミュニケーションをするためには、会話の中で「気持ちを伝える」能力が必要不可欠である。本稿は、そのような英語コミュニケーション力の指導、育成の糸口を見つける試みとして、会話分析の手法を用いて英語母語話者による自然会話データと日本人英語学習者による会話データを比較分析する。とくに、本稿では、質問—応答のやりとりの後に続く発話に注目する。特定のコンテキストにおいて、英語母語話者がどのように気持ちを表わしているのかを記述し、それを日本人英語学習者の発話行動と比較することで、学習者のコミュニケーション力に欠けている能力がどのようなものなのかを特定する。また、会話分析のアプローチがどのように英語教育に貢献できるかを考察する。

キーワード 気持ちを伝える英語コミュニケーション能力、英語教育、会話分析、自然会話データ、質問—応答に続く発話

Toward a Communicative Competence to Convey "Feelings" — A Conversation-Analytic Approach —

Kaoru Hayano

Center for Foreign Language Education, Ochanomizu University

2-1-1 Otsuka, Bunkyo, Tokyo 112-8610

E-mail: hayano.kaoru@ocha.ac.jp

Abstract It is a challenge for the majority of Japanese learners of English to convey spontaneous feelings when they converse in English. However, the communicative competence to convey feelings in conversation is essential if they are to communicate with others to achieve mutual understanding and develop rapport. In order to consider and specify what skills are involved in such competence, this paper focuses on the turn that follows an answer to a question. By examining natural conversational data using the methodology of conversation analysis, the paper illustrates how native speakers of English and Japanese learners of English use the turn after an answer respectively. Findings are discussed in light of how the conversation analytic approach can contribute to enhancing learners' communicative competence to convey feelings.

Key words communicative competence to convey feelings, English language education, conversation analysis, natural conversational data, the turn following an answer to a question

1. はじめに

日本の英語教育においてコミュニケーション能力の習得が重視されるようになって以来、学習者の自己発信力は向上しているように感じられる。たとえば、大学の英語の授業でプレゼンテーションをするとき、文法を正確に使い、スムーズに英語を話すことができる

学生は少なくない。

ところが、ペアワークで、あるいは非日本語話者と英語で自由に会話をするという場面になると、上手にプレゼンテーションができた学生であっても、途端にぎこちなくなってしまうということが非常に多い。決められた原稿がないやりとりの中で、相手の発言をし

っかり聴き、理解し、受けとめながら自分も発言をする、ということは、プレゼンテーションで一方向的に発信するよりも、さらに高度な能力なのかもしれない。しかし、それができない限り、日本人の英語力は、相手との相互理解を積み重ね、関係を築きながらコミュニケーションをするために十分なものとは言えないだろう。

では、相手と関係を築きながらコミュニケーションをするためには、具体的にどのような能力が必要なのだろうか。高等学校学習指導要領（外国語）（平成 21 年）では、習得すべき言語の働きとして、以下の 5 つが挙げられている。

- a) コミュニケーションを円滑にする。
- b) 気持ちを伝える。
- c) 情報を伝える。
- d) 考えや意図を伝える。
- e) 相手の行動を促す。

このうち、c) 情報を伝える、d) 考えや意図を伝える、e) 相手の行動を促す、という言葉の働きについては、英語教科書で取り上げられることも多く、また、大学生の英語力にも、高校までの英語教育の成果が出ているように感じられる。一方で、a) コミュニケーションを円滑にする、b) 気持ちを伝える、という点については、大いに課題が残っていると言えるのではないだろうか。コミュニケーションを円滑にし、その中で自分の気持ちをいきいきと伝える、ということになると、非常に消極的になってしまう、というのは、日本人英語学習者全般によく見られる傾向である。この課題を乗り越えるためには、気持ちを伝え円滑にコミュニケーションをするということが、実際にはどのようにして達成されるのか、具体的な対策が必要だと考えられる。

そこで、本稿では、とくに「気持ちを伝える」という言語の働きに注目し、英語母語話者がどのように気持ちを伝え合っているのか、実際の会話データを、会話分析の手法を用いて分析することによって明らかにする。そして、それを日本人英語学習者のインタラクションの有様と比較し、どのようなことが課題であるのか特定し、どのような指導が必要とされているのか、有効であるのか、考察を試みる。

2. 「気持ちを伝える」ということ

学習指導要領（平成 21 年）の中では、「気持ちを伝える」言葉の働きとして、(1) 褒める、(2) 謝る、(3) 感謝する、(4) 望む、(5) 驚く、(6) 心配する、という 6 つの行為が挙げられている。会話の中でこれらの行為をすることは、相手に対して親和的な気持ちを伝え、良好な関係性を作る上で大切なことだと考えられる。

しかしながら、褒める／謝る／感謝する／望む／驚く／心配するためにどのような英語表現を用いるのかをコンテキストから切り離して学んだとしても、それだけでは、相手との関係を築くコミュニケーション能力の育成に結びつけることはできないだろう。なぜなら、実際の会話の流れの中では、これらの行為をするタイミングは、あくまでも相手とのやりとりの中で生まれるものであり、相手の発話をしっかりと理解しながら会話の流れを積極的に作ることができなければ、このような気持ちを自然に伝える機会は巡って来ないからである。学習者が親和的な気持ちを伝えながら円滑なコミュニケーションをするためには、どのようなやりとりの中でどのように気持ちが伝えられるのか、より具体的に理解する必要がある。以下では、やりとりの流れの中で気持ちを伝える機会の一例として、質問一応答のやりとりの次の順番に着目し、その順番でどのような気持ちが、どのように伝えられるのかを検討したい。

3. 注目する現象：質問一応答の後の発話

日常会話において、質問をするということは、非常に高い頻度でなされる重要な営みである（Sacks, 1992）^[2]。相手に関する質問をして相手の話を引き出すということは、関係を築く上で基本的な手段だろう。そうすることで、相手に対する関心を示すことができる。しかし、質問によって成し遂げられることは、相手に関する情報を引き出すということに留まらない。質問一応答のやりとりの後には、しばしば親和的な気持ちを伝える機会が訪れている。

(1) 質問一応答のやりとりによく見られるパターン：

- 1 A: B に関する質問
- 2 B: 応答
- 3 A: → 親和的な気持ちを伝える機会

このやりとりの中で、気持ちがどのような表現で表

わされているかを理解し、実践することは、会話の流れの中で自然に気持ちを伝える力を習得するための、一つの糸口になると考える。そこで、本稿では、英語母語話者どうしの会話において、質問一応答のやりとりの後で、どのような気持ちがどのように表わされているかを示し、それを日本人英語母語話者のふるまいと対比することで、そこにどのようなギャップがあり、どのような指導が求められているのか検討する。

4. データと方法

4.1. データ

本稿で使用するデータは、以下の通りである。

- ・英語母語話者による会話データ：
 - (a) 先行研究で抜粋されている自然会話データ
- ・日本人英語学習者による会話データ：
 - (b) 『英語授業の実践指導事例集 Part 2』(①小菅敦子先生の授業 I, 監修: 金谷憲, 谷口幸夫, 協力: 英語教育・達人セミナー, ジャパンライム社)からの抜粋(以後「実践事例集: スモールトーク/インタビュー」と表記)
 - (c) 筆者が収集した, 日本人英語学習者(大学院生)が参加する英会話レッスンにからの抜粋(以後「オンラインレッスン」と表記)

英語母語話者による会話のデータ(a)は、会話分析の先行研究の中で紹介されている、英語母語話者による電話会話からの抜粋である。

日本人英語学習者による英語会話のデータのうち、(b)『英語授業の実践指導事例集 Part 2』は、英語教員向けの教材であり、模擬授業のビデオ映像が収録されたものである。ペアワークで行なうスモールトーク練習と、「ゲストについての記事を書くためにインタビュー質問をする」というアクティビティが含まれている。この模擬授業は、中学校英語教員による中学生を対象としたものであるが、生徒役で授業に参加しているのは大学生と思われる英語学習者である。日本人英語学習者による英語会話のデータの(c)は、日本で英語教育を受けてきた学習者(大学院生)が、インターネットビデオを用いて、英語を第二言語として話す人(フィリピン人)を相手に行なった英会話の様子をビデオ録画したものである。(a)と同様のコンテキストになるよう、学習者が相手に関する記事を書くという想定で

いろいろな質問するという設定で会話をしてもらった。その際、ただ一つひとつ、箇条書きのように質問をするのではなく、自然な会話としてつながりがあるやりとりを目指すよう指示した。

日本人学習者によるデータベースは非常に限られたものであるが、それでも、日本人英語学習者に典型的な傾向をはっきりと示しており、英語母語話者との比較を可能にするものだと考えられる。日本人学習者による英語の会話データ(a, b)は、筆者が会話分析の手法に従って文字化した。文字化に使用した記号については、本稿末の付録を参照されたい。

4.2. 方法

データの分析には、会話分析の手法を用いる。会話分析では、実際の自然な会話を録音または録画し、それを緻密に書き起こすことを出発点とする。その際、研究者の先入観によって、細かい、些末に感じられるようなことも切り捨てずに書き起こすことを重視し、そうすることによって、会話の細部に見られるパターンを記述することを目指す。そして、特定の現象の事例を集め、そこに見られるパターンがどのような仕組みで生まれるのかを、発話の組み立てと前後関係(「連鎖構造」とを丁寧に参照しながら明らかにする(Heritage & Atkinson, 1984^[3]; 平本, 2014^[4])。そうすることで、予め内容も流れも決められていない自然な会話の中で会話をするコミュニケーション能力を記述するのである。そのようにして得られた会話分析の知見は、英語教育にも応用可能なものだと考えられる(Wong & Waring, 2010^[5])。本稿では、英語母語話者の会話と日本人英語学習者の会話を分析することにより、英語で円滑にコミュニケーションをするということが具体的にはどのようなことなのか、日本人英語学習者に足りないのはどのような能力なのか、その一端を明らかにすることを目指す。

5. 分析

質問一応答の後、質問した話し手は、様々な気持ちや態度を表明するが、とくに際立って観察されるのは、(1) 相手が語ったことに対する驚きや感心(appreciation) と(5.1.節), (2) 相手にとって望ましいことを自分にとっても望ましいこととして受けとめたり、褒めたりして、相手に寄り添う気持ち(5.2.節)の表明である。以下では、先行研究を手がかりにしな

がら英語母語話者による気持ちの表し方を明らかにし、続いて、同じ場面で日本語母語話者がどのようにふるまっているかを記述する。

5.1. 相手の発話に対する驚き・感心の表現

まず、質問に対する答えの後の順番で、質問をした話し手が驚きや感心 (appreciation) を表わしているケースを検討する。

5.1.1. 英語母語話者の場合

英語母語話者どうしの日常会話において、質問に対する答えの後、非常に高い頻度で感嘆詞 *oh* が産出される (Heritage, 1984) ^[6]。事例 (2) は、友達どうしの電話会話からの抜粋である。この抜粋に先立つやりとりの中で、H は、手紙を送ると言ったのに送ってこないボーイフレンドに電話をかけたことを報告した。N は質問をしてさらなる話を H から引き出している。

(2) [Heritage, 1984: 310]

- 1 N: =.hhh Dz he 'av iz own apa:r [mint?]
 2 H: [hhh]
 3 Yeah:h,=
 4 N: → Oh.,
 5 (1.0)
 6 N: How didju git 'iz number,
 7 (.)
 8 H: I (h) (.) c(ha)lled infe:mation'n San
 9 Fr'nci:ssc(h) [uh!
 10 N: → [Oh:::..
 11 (.)
 12 N: Very cleve:r, hh-
 13 H: =Thank you[: I- .hh .hhhhhhh hh=
 14 N: [W'ts 'iz last name,
 15 H: =Uh:: Freedla:nd. .hh[hh
 16 N: → [Oh::.

この短いやりとりの中で、N は 3 つ質問をしている (1 行目でボーイフレンドの住居について、6 行目で H がどうやって彼の電話番号を調べたかについて、14 行目で彼の名字について)。そして、その質問に H が答えるたびに感嘆詞 *oh* を発している。Heritage (1984) ^[6] は、*oh* は話し手がなんらかの「状態の変化 (change-of-state)」を経験したことを表す感嘆詞であると分析している。*Oh* が質問に対する応答の後に、質問をした話し手によって産出される場合は、相手の答えによって、それまで自分が知らなかったことを知った、あるいは気づいていなかったことに気づかされたことを表す。上の例では、N は、H の答えの後に *oh* と言うことで、H の答えが、N が気づいていなかった、思い至っていないことを知らせてくれたということを伝えている。また、ここでの *oh* の発声は特徴的だ。

トランスクリプトの中で下線で示されているように、強勢を伴っており、また、コロンで示されているように、音が引きのばされている。このようにして *oh* を強調して発声することで N は、H の答えを、驚くべき、感心に値するものとして受けとめている。相手の答えが与えられた後にそのような気持ちを表すことは、その話題についての会話をさらに展開させていくことへとつながっていくだろう (*oh* とその後の話の展開との相関については、Jefferson, 1981 ^[7], Heritage, 1984 ^[6] に詳しい)。

もう一つ例を見てみよう。事例 (3) は、禁煙をしている E と、その友人 M とのやりとりからの抜粋である。M は、1 行目で、E がこれまでに何本タバコを吸ったか尋ねる。この質問 ("How many cigarettes yih had.") は、相手が、何本かはタバコを吸ったことを想定した質問になっている。これに対して、E は、"NO:NE (none)." と、この想定が間違っていたことを明らかにする。この答えは、(トランスクリプトの中での大文字使用と下線によって表わされているように)、音声的に強められており、M の想定が間違っていたこと (つまり、E は 1 本もタバコを吸っていないということ) をことさら強調しているように見える。

(3) [Heritage 1984: 340]

- 1 M: How many cigarettes yih had.
 2 (0.8)
 3 E: NO:NE.
 4 M: → Oh really?
 5 E: No.
 6 M: Very good.

E の答えの後、M は、"Oh really?" と言っており、E の答えを、驚くべき、感心に値するものとして受けとめている。事例 (2) で見た *oh* と同様に、この発話も強勢を伴っており、驚きが強調されているものと考えられる。このように答えを受けとめることで、M は、E が 1 本もタバコを吸っていないということを、驚くべき、めざましい達成として認めている。そのような気持ちを表すことは、M の想定に反してタバコを一本も吸っていないと答えた E の態度を支持するもののように見える。(6 行目の "Very good." という発話も興味深い、これについては 5.2.1 節で検討することにする。)

事例 (2)、事例 (3) が例示するように、英語母語話者どうしの会話では、質問に対する相手の答えに対して、質問した話し手が、驚き、答えに感心する気持ちを伝えることが多い。そうすることで、質問—応答のやりとりは、単なる情報のやりとりではなく、そこで語られた内容に関して気持ちを伝える機会となる。話し手は、相手の答えを興味深いものとして受けとめ、

会話を親和的に、円滑に進めている。このようにして、英語母語話者達は、会話を親和的に、円滑に進めているのである。

5.1.2. 日本人英語学習者の場合

前節で見たように、英語母語話者は自分の質問に対する相手の答えを、感嘆詞などを通して驚いたり感心する気持ちを伝えたりしながら受けとめる。そのようにして相手の答えを受けとめることは、日本人の感覚からして、違和感のあることであるとも難しいことであるとも考えにくい。しかしながら、同じコンテキストでの日本人英語学習者によるやりとりは、親和的、円滑なものとは言えない。データからは、日本人英語学習者も質問に対する相手の答えを価値あるものとして受けとめようとしていることは見てとれるのだが、その際に用いられるのは英語表現ではなく、日本語の感嘆詞であるケースが少なくない。また、事例(2)や(3)で見た *oh* や *oh really?* と比べ、音調的にも平板であることが多く、したがって、驚きや感心する気持ちはあまり表されていないように聞こえる。

事例(4)は、日本人英語学習者(JN)と、英語を第二言語とするチューター(T)との英会話レッスンからの抜粋である。Tは、自分が若い頃に経験したアメリカ留学について話をしている。その話を聞いていたJNは、途中で話を遮り、留学したときにTが何歳だったのか質問する(4行目で質問し始めるが失敗し、7行目でもう一度試みた際に答えを引き出すことに成功している)。この質問の後で、JNは、「あ:::」という感嘆詞を発している(10行目)。

(4) [オンラインレッスン: 4m05s]

- 1 JN: Pardon. You went to: (0.4) U.S.?
 2 (0.5)
 3 T: Yes, I went to::: the U.S., in New Jersey,
 4 JN: Wha- how [old
 5 T: [a-as an exchange student,
 6 (0.5)
 7 JN: How old your- how old [you::
 8 T: [I was-
 9 I was s::eventeen at that time?,
 10 JN: → あ:::
 11 (0.2)
 12 T: I just finished my highschool?,
 13 in the Phillippines, (0.4) a:nd-
 14 uh:::m... because in the U.S....

10行目の感嘆詞は、英語の感嘆詞 *ah* であるようにも見えるかもしれないが、実際の発声、音調を聞くと、明らかに日本語の感嘆詞「ああ」に聞こえる。また、発声の仕方も音調的に強調されていない(トランスクリプトで、「あ:::」と音の引きのばしを表すコロンの下

線がしてあるのは、そこでピッチが少し上がっていることを示すが、強調されて聞こえるほどのものではない)。したがって、これだけでは、相手の答えをしっかりと受けとめ、それに対する驚きや感心する気持ちを伝えることにはならないだろう。

事例(5)でも、同じことが起きている。これは、学生どうしのペアワークからの抜粋だ。AがBに "What's new today." と質問をすると、Bは、翌日にケーキを作る予定があると答える(5, 7, 9, 12行目)。するとAは、「ふん:::」と言いながら日本語の感嘆詞で相手の答えを受けとめている(13行目)。

(5) [実践事例集: スモールトーク]

- 1 A: Wha(h)t's new today.
 -----((4行省略))-----
 5 B: Tomorrow, I[:
 6 A: [tomorrow.=tomorrow.
 7 B: I::'m going to (0.4) cook?
 8 A: nn!
 9 B: cake?
 10 A: nn!
 11 (3.0)
 12 B: coo-k- a me- make a cake?
 13 A: → ふん:::~

この例でも、質問をした話し手(A)は、相手が質問に答えた後、なんらかの形でそれを受けとめようとしていることが分かる。しかし、その際、英語の *oh* や *oh really?* などの表現で自分が驚いていること、感心していることを表すことはできておらず、日本語の感嘆詞を用いてしまっている。そのために、その話題についての会話を積極的に展開させていくことに貢献できていないのである。

5.1.3. まとめ

母語話者同士の会話では、質問に対する答えが得られた後、*Oh*, や *Oh really?* などの表現を強調して発声することで、質問した方の話し手は、相手の答えに対し、驚きや感心していることを伝えることが多い。一方、日本人英語学習者も、自分がした質問に対する相手の答えを何らかの形で受けとめようとはしている。しかし、その際、英語の表現は使用できず、「あ:::」, 「ふん:::」など、日本語の感嘆詞を曖昧に発することに終始してしまうことが多い。

「あ:::」や「ふん:::」などの感嘆詞は、通常、相手の発話を受けとめる以上の働きはしにくいと考えられる(「ふん:::」の分析については Hayano [2013] 参照^[8])。つまり、日本人英語学習者は、せっかく相手に質問をし、相手から答えを引き出しても、その次の順番で相手の発話をしっかりと受けとめ、話題のさらなる展開につなげることができずにいるということが分かる。

5.2 相手に寄り添う気持ちを伝える表現

質問に対する答えの次の発話で表わされるのは、答えに対する驚きや、それに感心する気持ちだけではない。様々な形容表現を用いて、相手にとって望ましいことを自分にとっても望ましいこととして受けとめたり、褒めたりするケースもある。この節では、そのような気持ちが表現されている事例をとりあげる。

5.2.1. 英語母語話者の場合

Schegloff (2007) が指摘しているように、*How are you?* など、相手の様子を尋ねる質問がなされ、それに対する答えが与えられた後は、その答えにたいする「評価」発話が多く産出される¹⁹⁾。事例(6)はその一例だ。Ava は、Bee について、そして Bee のボーイフレンドの様子についてそれぞれ質問する(1行目, 3~4行目)。Bee がそれぞれの質問に "Oh surviving I guess," "He's fine," と答えた後、Ava は "That's good," と応じている。

(6) [Schegloff 2007: 124]

- 1 Ava: [.hh] How'v you bee:n.
2 Bee: .hh Oh:: survi:ving I guess, hh[h!
3 Ava: → [That's=
4 =good, how's (Bob),
5 Bee: He's fine,
6 Ava: → Tha::t's goo:d,

Ava の "That's good," という発話は、相手が元気であるという、相手にとって望ましいことを、自分にとっても望ましいこととして受けとめる働きをしていると言える。つまり、相手の立場に寄り添った気持ち、態度を表明している。

事例(7)は、事例(3)として既に挙げたものである。M は、E が何本かはタバコを吸っているという前提で質問をする(1行目)、E はその前提が間違いであり、一本も吸っていないということを告げる(3行目)。前節で見たように、E は、その答えに対してまずは驚き、感心していることを示すが(4行目)、その後、"Very good," と言うことで、E が一本もタバコを吸っていないということを肯定的に評価している。

(7) [Heritage 1984: 340] (再掲)

- 1 M: How many cigarettes yih had.
2 (0.8)
3 E: NO:NE.
4 M: Oh really?
5 E: No.
6 M: → Very good.

既に見たように、3行目のEの答えは音調的に強調されており、自分が相手の想像に反して一本もタバコ

を吸っていないという事を、めざましい達成として提示しているようにも見える。そのようなコンテキストで "Very good." と述べることは、相手の気持ちを汲み、褒める行為として理解できるだろう。(ここでは紙幅の都合上詳しく見ないが、事例(2)の12行目でも、相手を褒める発話 ("Very clever,") が質問-答えのやりとりの後に産出されている。)

このように、英語母語話者どうしの会話では、相手に質問をすることが相手の立場、心情に寄り添った気持ちを伝えたり、相手の達成を褒めたりする機会をもたらすことが少なくない。言い換えるならば、いわゆるポジティブ・ボライトネス・ストラテジー (positive politeness strategy, Brown & Levinson, 1987¹⁰⁾) としての機能を果たすような発話が行なわれているのである。そうすることで、英語母語話者は、相手に寄り添うような態度、気持ちを伝えることができるのだろう。

5.2.2. 日本人英語学習者の場合

5.2.1.節で見たことは、英語会話に限られたことではない。日本人どうしの日本語による会話であっても、同じパターンのやりとりはなされる。そして、日本人英語学習者が英語で会話をする際にも、相手の答えに対して、そこで表れた気持ち、態度に寄り添うような受けとめ方をしようとしていることは見てとれる。しかしながら、その表現は、笑いや拍手など、非言語行動に頼ることが多いという傾向が観察される。

事例(8)は、学習者(H, F, I, 他数名)が、クラス外から招いたゲスト(日本人)にインタビューをするというアクティビティの一部である。この抜粋では、学習者の一人、Hが、ゲストにジャイアンツ(プロ野球チーム)の中で好きな選手は誰か尋ねる(1~2行目)。この質問に、ゲストが松井だと答えると(3行目)、H以外の学生が、答えを繰り返したり、「え::」と歓声を上げたりして、クラスの雰囲気は盛り上がる(4, 5行目)。そして、質問者であったHは、6行目で(もう一度答えを繰り返すゲストの発話とオーバーラップしながら)拍手をして笑う。

(8) [実践指導事例集: インタビュー]

- 1 H: ah:: who is a::: favorite a::: spo- a-
2 player? [in Giants].
3 F: [あ:::
3 Gst: ああ. Oh, of course Mr. Matsui.
4 I: Ma [tsui.
5 (複数): [↑え:::
6 H: → [((拍手)) h h h h
7 Gst: [Mr. Matsui.
8 (0.4)
9 Gst: My: favorite baseball player.
10 H(?): h h h h
11 I: は:い.

- 12 Gst: (Iを指差す)
13 I: Do you play baseball?

Hの6行目の発話は、ゲストの答えを、賛同し得るものとして賞賛しようとしている態度の現れであるように見える。しかしながら、そのような態度は言葉では表わされておらず、拍手と笑いという非言語的な手段によってなされており、その後のやりとり結びついていない。そして、この話題はそれ以上発展することなく、他の学習者(I)による次の質問へと移行してしまう(11行目以降)。

この例は授業でのやりとりからの抜粋だが、一对一の英会話のデータでも、相手に寄り添う気持ちは、笑いなどの非言語行動によって表わされることが多く、英語ではよく用いられる、*That's good*, など、ポジティブ・ポライトネス (Brown & Levinson, 1987^[10]) を伝える言語表現はほとんど用いられていない。本研究は限られたデータに基づくものだが、このようなパターンは日本人英語学習者に典型的なものだと言えるのではないだろうか。

5.2.3 まとめ

本節では、質問に対する答えの後、質問者がどのようにして相手に寄り添うような、親和的、肯定的な気持ちは表しているかを検討した。英語母語話者による会話(そしておそらく日本語母語話者どうしの日本語での会話)では、*That's good*, *Very good*, など、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーとも言えるような、肯定的な評価によってそのような気持ちは示されるのに対し、日本人英語学習者は、笑いや拍手など、非言語的な手段に頼っているということが観察された。

6. 考察

本稿では、英語母語話者と日本人英語学習者が、会話の中でどのように気持ちを伝えているのか、質問—応答に続く順番に焦点をしばって検討してきた。英語母語話者は、驚きや感心 (appreciation), 相手に寄り添う態度を、言語表現や発声の仕方(強勢、音の引きのばしなど)を通して表現する。それに対して、日本人英語学習者は、日本語感嘆詞を使用したり、拍手や笑いなど非言語的な手段に頼るなどしていた。このことは、日本人英語学習者も、質問に対する答えの後、相手の答えに驚いたり、感心したり、相手の気持ちに寄り添うなど、様々な気持ちを伝えようとしているということを意味するのだろう。しかしながら、そのような気持ちや態度をしっかりと言葉で伝えない限りは、会話はそこから展開することはなく、ひいては、相手と積極的に関わろうとする姿勢を伝えることができないということになってしまいかねない。

では、なぜ、このようなことが起きてしまうのだろうか。英語母語話者どうしの会話で使用されていた気持ちを表す表現は、どれも、文法的に非常にシンプルで簡単なものばかりだった。日本人英語学習者が、質問や答えはきちんとすることができるにもかかわらず、そのようにシンプルな表現を使用できていないということは、不可解なことであるようにも思われる。このことには、このような場面での言葉の使い方が、日本の英語教育における指導の死角になっているということが関わっているのかもしれない。英語の授業で、質問の仕方や質問への答え方を学習、練習する機会は多く用意されている。ところが、答えの後にはどのようにその答えを受けとめればいいのか、どのように会話をつなげればいいのか、ということについて、明示的な、体系的な指導がなされることは少ない。「質問に対する答えの後には *oh* と言う」、「*That's good* と言う」、などと指導することは、あまりにも当たり前のこと、あるいは些末なことであるように感じられ、その結果、軽視されがちなのかもしれない。しかしながら、これまで会話分析の先行研究が様々な会話の側面について示してきたように、実際のコミュニケーションにおいては、このようなちょっとした場面での言葉の使い方が、円滑なコミュニケーションをする上で、大きな役割を果たすのである。

Hagoort & Meyer (2013)^[11]が述べているように、話すプロセスと聞くプロセスとは、分離することができない^[10]。実際の会話に参加するということは、相手の話を聞き、受けとめ、それに対する自分の気持ちや理解を示した上で、自分の考えを発信するという、不可避的にインタラクティブなプロセスに参加することである。「気持ち」を伝えるということをとってみても、自分の気持ちだけを一方的に伝えるということは考えにくい。相手の発話をしっかりと聞き、そこに表われる相手の気持ちへの理解を十分に示して、初めて自分の気持ちを相手に伝える機会が訪れるのである。本稿でとりあげた、相手に質問をし、得られた答えを受けとめ、それに対する自分の気持ちを伝える、ということは、そのようにインタラクティブなプロセスのごく一部に過ぎない。しかしながら、このように具体的なコンテキストでの言葉の使い方を一つひとつ身につけていくことが、グローバルに活躍しようとする人材にとって本当に必要な英語コミュニケーション力の習得につながるのではないだろうか。

7. 今後の課題

本稿で行なった議論は、限られたデータに基づくものであり、この研究を発展させていくためにはより大きな、多様なデータを分析する必要があるだろう。ま

た、本稿では質問一応答に続く発話に注目したが、会話の中で話し手が気持ちを伝えるコンテキストは、他にも沢山ある。様々なコンテキストでの様々な言葉の使い方について理解を積み重ねることで、「気持ちを伝え、円滑にコミュニケーションをする英語コミュニケーション力」の全容を明らかにし、その習得に結びつけることができるだろう。

最後に、会話分析の手法によって得られる知見を英語教育に還元する可能性について検討したい。会話分析の手法は、これまで、医療 (Heritage & Maynard, 2006^[12]) やメディアコミュニケーション (Clayman & Heritage, 2002^[13]) など、様々な場面でのコミュニケーションの理解、ときにはそのクオリティ改善のために活用されてきた (Antaki, 2011^[14])。そんな中、最近では、会話分析の知見を英語教育に応用しようとする議論も始まっている^{[5], [15], [16]}。日本の英語教育においては、会話分析のアプローチを活用しようとする動きは、未だ見受けられない。しかしながら、文法はできても円滑にコミュニケーションをすることが苦手な日本人英語学習者にとって、会話分析の知見を利用した指導がグローバルな場面でのコミュニケーションのクオリティ改善につながる可能性は高いのではないだろうか。

謝辞

本稿執筆に際し貴重なコメントを下さった井出祥子先生と査読者の先生方に感謝申し上げます。

文 献

- [1] 文部科学省, 高等学校学習指導要領, 2009.
- [2] H. Sacks, *Lectures on Conversation Vol. 1*, Oxford, Blackwell, 1992.
- [3] J. Heritage & J. M. Atkinson, "Introduction," in J.M. Atkinson & J. Heritage (Eds.), *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*, pp.1-16, Cambridge, Cambridge University Press, 1984.
- [4] 平本毅, "『共感の技法: 福島県における足湯ボランティアの会話分析』書評論文," 社会言語科学 第16号第2巻, 75-82, 2014.
- [5] J. Wong & H.Z. Waring, *Conversation Analysis and Second Language Pedagogy: A Guide for ESL/EFL Teachers*, New York, Routledge, 2010.
- [6] J.Heritage, "A change-of-state token and aspects of its sequential placement," in J.M. Atkinson & J. Heritage (Eds.), *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*, pp.299-345, Cambridge, Cambridge University Press, 1984.
- [7] G. Jefferson, "The abominable 'ne?': A working paper exploring the phenomenon of post-response pursuit of response," Occasional Paper No.6, Department of Sociology, University of Manchester, Manchester, England, 1981.
- [8] K. Hayano, *Territories of Knowledge in Japanese Conversation*, Unpublished doctoral thesis. Radboud University Nijmegen, Nijmegen, The Netherlands,

2013.

- [9] E.A. Schegloff, *A Primer for Conversation Analysis: Sequence Organization*, Cambridge, Cambridge University Press, 2007.
- [10] P. Brown & S.C. Levinson. *Politeness: Some Universals in Language Usage*, Cambridge, Cambridge University Press, 1987.
- [11] P. Hagoort & A.S. Meyer, "What belongs together goes together: The speaker-hearer perspective." *Frontiers in Psychology*, 4, pp. 1-2, 2013.
- [12] J. Heritage & D. Maynard, *Communication in Medical Care: Interactions between Primary Care Physicians and Patients*, Cambridge, Cambridge University Press, 2006.
- [13] S. Clayman, & J. Heritage, *The News Interview: Journalists and Public Figures on the Air*, Cambridge, Cambridge University Press, 2002.
- [14] C. Antaki (Ed.), *Applied Conversation Analysis: Intervention and Change in Institutional Talk*, New York, Palgrave MacMillan, 2011.
- [15] I. Koshik, "Questions that convey information in teacher-student conferences," in A.F.F.S. Ehrlich (Ed.), *Why Do You Ask?: The Function of Questions in Institutional Discourse*, pp. 159-86, Cambridge, Cambridge University Press, 2010.
- [16] 細田由利, "「第二言語で話す」ということ: カタカナ英語の使用をめぐって," 社会言語科学 第10巻2号, pp.146-157, 2008.

データ出典

『英語授業の実践指導事例集 Part 2』(①小菅敦子先生の授業 I, 監修: 金谷憲, 谷口幸夫, 協力: 英語教育・達人セミナー, ジャパンライム社)

付録 トランスクリプトで使用した記号

(0.2)	沈黙の長さを示す秒数
=	ラッチ
[オーバーラップの開始
]	オーバーラップの終了
::	音の引きのばし
<u>word</u>	強勢
↑	極端なピッチの上昇
h h h	呼気, あるいは呼気による笑い
.hh	吸気
word::	緩やかなピッチの上昇
wor-	声門閉鎖
WORD	大きなボリュームによる発声
.	下降イントネーション
,	継続を表すイントネーション
?	上昇イントネーション
?,	多少の上昇イントネーション
()	不確かな聞き取り
(())	トランスクリバラーによる付加的な情報